



発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

池上遺跡の発掘調査と見学会の開催

令和 4 年 3 月 12 日(土)、市内池上で発掘調査中の池上遺跡において現地見学会を開催しました。調査は、(仮称)道の駅「くまがや」整備予定地内で、令和 2 年度から 4 か年かけて実施しています(右上写真、令和 3 年度調査区全体の様子)。

これまでの調査で弥生時代中期(およそ 2,000 年前)の集落跡、古墳時代前期(4 世紀代)の集落跡及び同時期の方形周溝墓等が確認されています。奈良・平安時代(8 世紀後半～9 世紀前半)では掘立柱建物跡群が見つっています。なお、古墳時代から奈良・平安時代にかけて池上地内を流れていた河川跡も確認され、各集落からの土器等が見つっていることから、当時の生活の痕跡を探ることができます。

見学会の参加者は、定員を上回る 200 人で、様々な年齢層の方々にも熱心に参加していただきました(右下写真)。中には「地元で 2,000 年も前の古い遺跡が確認されたのは驚きだ、感動した」、「道の駅ができるのは知っていたが、発掘調査をやっていたのは知らなかった、参加できてよかった」等大変興味深い意見をいただきました。

調査は令和 5 年度まで実施し、それまでに一定の成果が上げれば、同じような見学会を再度開催できるよう検討していきます。(腰塚)



埼玉県指定文化財「諏訪神社本殿」保存修理事業の完了

「諏訪神社本殿」は、現在の熊谷市上新田に所在した柴田信右衛門豊忠によって延享 3 年(1746)に創建されたと伝えられ、その後、嘉永 5 年(1852)に補修されました。創建時の棟札によると、「歓喜院聖天堂」の造営に深く関わった三ヶ尻村出身の内田清八郎が大工棟梁となり、上州花輪村(現在の群馬県みどり市)出身の石原吟八郎が彫刻を担当しています。また、林兵庫正清が細工の意匠に関わったほか、彩色は聖天堂と同じく狩野派の絵師が施し、高い技術力を発揮しました。同時期に建立を進めていた妻沼聖天山の歓喜院聖天堂の工事中断の間に、この本殿が手掛けられたものと推測されます。

本殿屋根の檜皮葺(ひわだぶき)は、信州松本城下の太田松右衛門等の技術に委ねられ、名工集団によって本殿の建立がなされたことが分かります。

現在、彩色の多くが薄れていますが、各所に施された人物や動植物の装飾彫刻は、放たれる雰囲気の際立ち、実際の規模以上の風格を感じることができます。

旧来から建造物全体の老朽化及び檜皮葺屋根の毀損が課題となっていたことから、令和 3 年(2021)



11 月に保存修理委員会(柴田忠雄会長)が発足し、令和 4 年(2022)1 月、県と市の補助事業として、檜皮の葺替えをはじめとする各所の緊急的な保存修理事業が開始されました。熊谷市教育委員会が事業監理を担当し、株式会社大島工務店が工事請負者として事業を進め、同年 3 月無事に竣工しました。同年 5 月 14 日(土)には特別公開され、約 450 人が来場しました。今後は、この貴重な歴史的建造物を次世代に継承することが求められます。(山下)

改修後の諏訪神社
本殿正面

葺替え後の檜皮葺屋根

市内遺跡発掘情報

令和3年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今回は、令和3年度9月以降に実施した前中西遺跡の調査2地点について御紹介いたします。

令和3年9月から令和4年1月まで実施した一つ目の調査地点は、遺跡範囲北西に位置します。本調査地点では、弥生時代の竪穴住居跡5軒、方形周溝墓3基、古墳時代後期の掘立柱建物跡1棟等が見つかりました。

令和4年2～3月に実施した2つ目の調査地点は、遺跡範囲ほぼ中央付近に位置し、弥生時代の竪穴住居跡1軒、溝跡1条が見つかりました。

いずれの調査地点においても本遺跡の主体となる弥生時代の遺構・遺物が多数見つかりましたが、特に後者の調査では、本遺跡範囲中央付近には所在しないと思われた住居跡が確認されたことから、本遺跡の弥生時代集落の様相を考える上で新たな成果を得ることとなりました。(松田)



弥生時代の竪穴住居跡

新指定文化財・有形文化財考古資料

令和4年3月31日付けで、市の文化財に指定された考古資料2件について紹介します。

「中西遺跡出土遺物(土偶、辰砂、パレット状土器)」: 市内中西四丁目に所在する中西遺跡では、縄文時代後・晩期の遺物が多数出土しています。この度指定された出土遺物は、土偶51個体、土器や土偶等に施す赤彩の原材料である辰砂(しんしゃ)と呼ばれる鉱物片22点、赤彩を施す際に使用されたとと思われるパレット状土器1点です。

「立野古墳群第12号墳出土遺物(一括)」: 立野古墳群は、市内板井に所在する古墳時代末に築造された群集墳です。第12号墳は直径約21.5mの円墳で、出土した土師器・須恵器、大刀、刀装具、鉄鏃、刀子、馬具の金銅製杏葉(ぎょうよう)・鉸具(かこ)が一括して指定されました。中でも杏葉は、鑿(たがね)で細い線を刻む毛彫(けぼり)という技法により唐草文様等が刻まれた県内初で唯一の出土品です。

これらの2件の考古資料は、本市のみならず東日本の縄文時代や古墳時代を研究する上で優れた資料であることから、市の有形文化財・考古資料に指定されました。(松田)



中西遺跡出土土偶



立野古墳群第12号墳出土金銅製杏葉

連載 くまがやの古墳群

㊥ 円山(まるやま)古墳群ー古墳の主は身分の高い人物?ー

円山古墳群は、大里地区の箕輪、荒川右岸の江南台地東端に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。かつて古墳が立地していた台地は、標高約35mを測り、すぐ北及び東に荒川右岸の低地を、西にその低地から南北に入り込む谷を臨む場所にありました。

本古墳群では、6世紀中頃～7世紀初頭築造の円墳が3基確認され、その規模は直径約17～22mです。また、第2号墳と呼称した円墳を除き、遺骸を埋葬した施設である石室は不明です。いずれの古墳も既に削平を受け消滅しています。

第2号墳は、6世紀中頃～後半に築造され、近隣で産出する凝灰岩質砂岩を石材にした石室をもち、耳環、直刀の鞘尻(さやじり)金具、刀子、鉄鏃が出土しています。また、古墳の周囲に巡らされた周溝からは、男子・女子の人物埴輪、靫(ゆぎ)・髷(さしば)・帽子形の器財埴輪、円筒埴輪等が出土しています。靫は背負う矢入れの道具で、髷は貴人の顔を隠すためにかざした団扇(うちわ)状のものです。いずれからも、武力に長け身分の高い人物の存在が想起され、第2号墳が、古墳群中の中心的な古墳であったことは想像に難くありません。(吉野)



円山古墳群第2号墳出土
靫形・髷形埴輪(左から)

文化財センター通信

◇源宗寺本堂保存修理事業竣工

令和3年12月、源宗寺新本堂が完成し、12月25日には、熊谷市長はじめ関係者出席のもと新本堂完成の落慶法要が営まれました。12月下旬に5日間にわたって開催された一般公開では、大変多くの方が来場し反響も大きかったことから、急遽、新年三が日にも公開を行い、8日間で延べ約1,700人の来場がありました。

また、令和4年3月上旬には仏像第1期修理分の寄附者名簿の作成が完了し、現在、薬師如来坐像の掌の上にはその名簿が収められた桐箱が奉納されています。2月からは、第1・第3日曜日の一般公開が再開され、今後も継続していく予定です。機会がありましたら、どうぞ御来場ください。（山川愛）



◇野原古墳「踊る埴輪モニュメント」建立

令和4年4月23日（土）、市内野原の八幡神社で、同場所に立地する野原古墳から1930年に出土した「踊る埴輪」を模した石製モニュメントの完成を祝う建立除幕式が開催されました。

「踊る埴輪」は、野原古墳から出土した後、現在の東京国立博物館に移管されています。2体の人物を形象した埴輪は、踊っているような容姿と生き生きとした表情から「埴輪・踊る人々」と命名されています。現在では「踊る埴輪」として全国的な知名度を誇るとともに、東京国立博物館のメインキャラクターとしても、多くの人気を集めています。

この石製モニュメント製作のため、令和3年3月、地元自治会の有志を中心に、踊る埴輪モニュメント建立委員会が発足しました。像の製作等準備を進め、令和4年3月に起工し、同月末に完成しました。埴輪モニュメントは花コウ岩製で、高さは大きな像が195cm、小さな像が174cmで、出土した原物の約3倍の大きさとなっています。当日の式典には、地元小学生と地元関係者等約30人が出席し、モニュメントを除幕した後、八幡神社宮司による神事が執り行われました。（山下）



◇「歓喜院聖天堂」国宝指定10周年記念歓喜院院主・市長対談

令和4年4月26日（火）、妻沼聖天山の籠堂を会場に、国宝「歓喜院聖天堂」の国宝指定10周年を記念した熊谷市・小林哲也市長と妻沼聖天山歓喜院・鈴木英全院主による対談が行われました。対談は、「熊谷の文化遺産とともに歩む街づくり」をテーマとして、江南文化財センター職員がコーディネートを担当しました。対談では、歓喜院聖天堂をはじめとする文化財・文化遺産を活用した街づくりの方策や、保存修理技術者の育成に向けた取組等、多岐に渡る分野が話題に上がりました。熊谷の文化を発信するためにどうするべきかが、文化の薫るまちづくりに向けて、思い巡らすことができる機会となりました。対談の様子は、特定NPO くまがや小麦の会の広報紙等に掲載される予定です。（山川愛）



【文化財探訪 文化庁100年フード「五家宝」—五家宝の起源—】

文化庁100年フードに認定され、有識者特別賞を受章した熊谷銘菓「五家宝」。その起源には諸説あり、北関東各地に伝承が残ります。茨城県の水戸周辺では「吉原殿中」と呼ばれる菓子があり、五家宝の原形と考えられています。また、群馬県の旧五箇村や茨城県の旧五霞村という地名から生まれたという説もあります。熊谷では、18世紀後半、旧奈良村（現在の市内四方寺）の慈善家・吉田市右衛門が庶民に与えた焼き米の菓子を原点とする説があります。19世紀には、旧玉井村の清水庄次郎や高橋忠五郎らが改良を進める一方、20世紀には、五家宝の老舗「水戸屋」が全国的な販売を始めるなど、現代の「五家宝」の基礎を固めました。

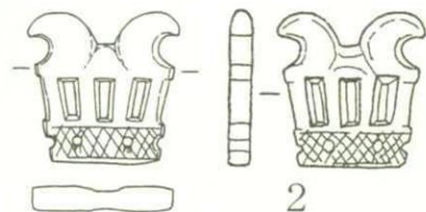
ところで、ノーベル文学賞を受賞した川端康成は、熊谷の五家宝が好物だったことで知られています。熊谷出身の文芸編集者・竹田博さんに送った手紙には、「熊谷からの五家宝おめぐみありがたく拝受いたしました。好物ですので賞味させていただいております。」と記されています。世界的な文学者が愛した熊谷の名物「五家宝」、みなさんで次世代に引き継いでいきましょう。（山下）



文化財コラム 謎の遺物「本村型琴柱形石製品」

地下から発見される遺物は、発掘調査以外にも農作業や土木工事等で見つかってきました。また、多くの場合正確な出土地が不明となり、遺跡地の性格や共伴品との関係が不明となった点は残念であるものの、蒐集された遺物が持つ史料価値が無くなったわけではありません。日本の考古学研究の曙期は、このような蒐集品の研究から始まっていきます。今回、考古学研究上に多大な貢献をした根岸武香（1839～1902）の蒐集遺物から、「本村型琴柱形石製品（写真）」を紹介します。

本村型琴柱形石製品は、滑石や蛇紋岩製で扁平、角状突起、円孔、方窓を開けた3～4 cm程の小品です。本村型の名称は、さいたま市の埼玉大学校地の発掘調査に際し、古墳時代住居跡から発見された滑石製品（図2）を本類考古資料の学術名としたものです。よって、根岸家所蔵品は、埼玉県内2例目の確認資料です。実は、本村型の類例は、日本全国で13例しか確認されていない希少な遺物で、類例が少ないため使用方法や性格等はよく分かっていません。他の琴柱形石製品は、本村型より大きく貴重な碧玉を使う等、指導者や権力者の持つ玉杖の装飾となっており、古墳に副葬された例が多く、本資料も、元来は図2のようであったと思われます。また、垂飾（ペンダント）、髪飾りの一部、ミニ玉杖との説もあり、性格・使用法は未だよく分かりません。作られた時期は、古墳時代（5～6世紀）に限られるようで、市内出土とすれば、同時代の遺跡で根岸武香の蒐集品に入っている船木遺跡の可能性が高いと考えられます。この琴柱形石製品が、「何に使われたのだろうか」への答えが出るのは、まだ少し先かも知れません。（新井）



マニアックな文化財メモ

第77期本因坊戦第2局と国宝「歓喜院聖天堂」囲碁彫刻

囲碁界で最も伝統あるタイトル戦である第77期本因坊戦七番勝負第2局が、令和4年5月24、25両日に埼玉県熊谷ラグビー場で開催されました。対局の前日の23日、本因坊文裕（井山裕太九段）と挑戦者の一力遼棋聖が、本因坊戦開催の契機となった妻沼聖天山の国宝「歓喜院聖天堂」の囲碁彫刻をはじめとする彫刻群を視察しました。歓喜院・鈴木英全院主による祈禱法要の後、江南文化財センター職員が国宝建造物の各所を解説しました（右写真）。奥殿の囲碁彫刻は、平成の大修理時には盤面の色が残されていなかったことから、本因坊道策と熊谷出身の棋士・熊谷本碩（ほんせき）の棋譜を再現したものです。（山川愛）



編集後記

ここ数年は、コロナ禍の影響もあり、文化財に関連した事業も縮小せざるを得ない時期もありましたが、その後、感染状況の改善やワクチン接種等も進み、徐々に通常の動きに戻りつつあります。今回の紙面では、遺跡発掘調査と見学会、考古資料の文化財指定、源宗寺本堂及び諏訪神社本殿の保存修理事業の完了、五家宝の100フード認定等幅広い領域の文化財保護事業を紹介しています。熊谷うちわ祭も3年ぶりに山車・屋台の巡行が行われる等、新たな生活様式とともに、文化の継承が取組まれています。文化の薫りがするまちづくりが熊谷の魅力となるように、文化財・文化遺産を通じた情報発信と普及啓発を今後も進めていきたいと考えています。（山下）



発行：令和4年6月1日（2022/6/1）

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷市観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中